日本医史学雑誌　第63巻第4号（2017）　495–505

青山胤通家関連文書（5）

青山文書の会

［29］品川弥二郎の書簡（前承）

12　明治　年11月9日　（47号）

御健全奉賀候，サテ病人も昨日豚児帰宅面会せしも何たる感しも無之候得ハ，先あしき方にては無之，今以耳ニ入ル事有之，両三日食事の過度ニ進むニハ誠ニ気遣ひ申候，昨今とも四回ニテ膳ニアルモノ不残食ひ尽し申候，丸薬も一昨日ニテ二周（ママ）間ニ相成申候，此先きとも日ニ一粒増シ致し可然哉，三周間迄ハヨイトノ御話も有之候得共，如何哉と掛念仕候，右御報告旁草々頓首

十一月九日　夜　やじ

青山様

13　明治　年2月24日　（48号）

（封筒表）　青山医科大学教授様　親展急

（封筒裏）封　駿河台袋町十二番

平田方ニテ　品川弥二郎

御多用中申上兼候得ども平田東介事，過日来風邪ニ悩ミ居候処，一昨夜より発熱四十度ニ昇リ右季肋部ニ非常ナル痛ミヲ生シ，相磯[1]・古谷[2]診察候得ども病名未定ナリ，兼テ肺患者ニテ身体衰弱之男故ニコノ難病ニ罹リ全快如何哉と煩念仕候，何卒今日御授業相済ミ次第駿河台袋町十二番平田方え御見舞被下度奉願上候，右御願迄匆頓首

二月二十四日　午前　やじ

青山様

（1）相磯（あいそ）　慥（まこと）　明治15年東大医学部卒業．21年より大正13年迄侍医を勤める．

（2）古谷正威（ふるやまさたけ）　明治20年東大医学部別課卒業．

14　明治　年9月7日　（49号）

（封筒表）（神田）区裏猿楽町青山博士閣下　親展

（封筒裏）　封　九段富士見町　品川弥二郎

昨夜ハ意外之風雨何之御障りも無御坐候や，サテ病婦義婚儀ヲ済マセ安堵いたし為メカボンヤリ致シ，例之如き夢幻と相成，昨日迄五日間ほどハ極楽浄土眼前ニ現れ，昨今ハ松陰吉田先生剣ヲ持シテ床の上ニ顕レ候様ナル為体ニテ注射ハ五六回ハドウシテも不免ナリ，何卒御閑暇之節御見舞被下度奉待候，近況申上置度，草々頓首

九月七日午後　やじ

青山様

15　明治　年1月24日　（50号）

（封筒表）大学ニテ　（青）山博士様　御直

（封筒裏）　九段　品川弥二郎

馬喰町三丁目　朝萬

一昨日は御来訪被下感謝々々，御蔭にて夕刻より落チ付キ旧ニ復し，誠ニ静穏ニ少しも変りなく今朝などハ少しの変り無之候間先ツ御安神可被下候，サテイツモイツモ申上兼候得共バクロウテウの旅宿業ヲ営ミ居ル新井（朝萬（アサヨロヅ））と申者，是非死出之御暇乞として大先生青山君之引導ヲ渡シモライ度との事，平常の家ニハ御来診ハ万々無之事とハ存候得共，一応御伺セ申上候間よろしく御願申上候，為其草々頓首

一月廿四日　やじ

青山様　侍曹

林川ハやじガ処ニ寄宿シテハクレヌカ，先達御話ノ事もあり思ひ出し，乍序御尋ね申上候

16　明治　年12月8日　（52号）

（封筒表）　青山様　御直　品川

（封筒裏）封

洋服ニハ坐蒲団御入用ハ無之様ナレ共，折角病婦之心配せしもの故歳末之御しるしニ差出候間，御笑留可被下候，為其草頓首

十二月八日　　やじ
青山様

17　明治　年5月5日　　（53号）
（封筒表）神田裏猿楽町六　　青山胤通様　御直
（封筒裏）封　　九段富士見町　品川弥二郎
御健勝在られ候半と奉敬賀候，サテ因藤真蔵と申者，本年卒業スル筈中学校生徒，一昨日頃本郷大学病院ニ入リ伝染病室ニ上等室明キナキ為メ不得止下等室ニテ療養致し居リ候由，此男ハ馬関ノ豊永長吉[1]と申名高き老人之三男ニテ有之，老人豊永ハ夫婦連レニテ頃日上京間もなく愛子ノ三男病気之為メ大ニ弱リ居リ申候，何卒自然御巡察之節もアラバ可然御診察被成下度奉願候，豊永と申老人ハ東西京・大坂等ニテ知らぬものなき商工業家之確実なる男ナリ，よろしく御賴ミ申上候
〇当方之病人ハ不相替注射々々ニテ此両三日ハ尤烈しく，今日ハ午前ニ十回も致し申候，何も御察し可被下候，御序もあらハ御見舞被成下度奉願上候，先ハ為其草々頓首
五月五日　　やじ
青山様　侍曹

（1）豊永長吉　明治期の山口県実業家．天保2年長州藩士下村家に生まれ，因藤家の養子となる．坂本龍馬と知り合い長州との繋がりを付ける．又山県有朋の媒酌人を勤める．製紙・化学工業・港湾建設・金融会社を興す．明治4年豊永長吉と改名．明治44年没．享年81．（1831–1911）

18　明治　年12月9日　　（54号）
（封筒表）本郷区第一医院分室第一号
青山博士　閣下　親展
（封筒裏）封　　九段　品川弥二郎
昨日ハ御来診被下難有感謝々々，其節御内願申上置候国光社主 西澤之助[1]と申者，第一医院分室第一号ニ過ル六日入院致し，三浦謹之助[2]君主治医之由，甚恐縮なれとも三浦氏へ一言御伝へ被下候て注意被成呉候様御願申上候，入院後痛ミ強ク困リ居リ候トも云々，コレもモルヒネモノカと気（の）どくニ存候
当方病人不相変耳と眼ニ極楽浄土が入リやじニも早ク安心決定セヨと之御説諭，御笑察可被下候，今朝片山博士[3]来診致サレ申候，先ハ為其草々頓首
十二月九日　夜　　やじ
青山様　侍曹

（1）西　澤之助　明治期の雑誌出版者及び教育者．嘉永元年生まれ．明治22年国光社設立し，雑誌「国光」「女鑑」「日本赤十字」を発行．又小学校教科書編集発行．33年本郷に「日本女学校」設立．後に大塚に移り「帝国女子専門学校」と改称し，昭和20年米軍の空襲により全焼．その後相模原に移り「相模原女子大学」となる．昭和4年没．享年82．（1848–1929）
（2）三浦謹之助　明治28年より大正13年迄帝国大学医科大学内科教授を勤める．
（3）片山国嘉（くによし）　明治21年より大正10年迄帝国大学医科大学法医学教授を勤める．

19　明治　年3月3日　　（56号）
（封筒表）（猿）楽町　青山様　御直　九段　品川
（封筒裏）
今朝御見舞被下候よし，御多用中万謝々々，夕刻ニナルト一昨日来之味を覚ヘシモノカ，痛苦ニ堪られぬとの苦情，眠り薬ニテ一時間斗りハ臥し居候，何トカよき御工夫無之候や，昨年ノ二の舞ト相成てハ実ニ閉口仕候，病婦の請求ニヨリ此手紙持セ差出候間，自然御閑暇も候ハヽ御来光被下間敷や，右申上度匆々頓首
三月三日　　やじ
青山様

20　明治　年7月15日　　（57号）
（封筒表）青山様　御直　　やじ
（封筒裏）封
荊婦快気祝ノ心得ニて麁物差出候処御返シニ相成，金円ニて差出シタルハ禮ヲ失ひタルトテ病気再発之様ニ荊婦ハ気遣ひ居申候，老台ニ御礼トシ

テ差出スニ非ス，御愛児様ヘコノ品進上仕度ト荊婦之寸心故，何卒御落手被下度やじよりも奉願上候，為其匆頓首

七月十五日　やじ

青山様

［30］渋澤栄一の書簡

渋澤栄一は明治・大正期産業界の最大指導者．天保11年武蔵国血洗島村（埼玉県深谷市）の名主の長男として生まれる．徳川慶喜の弟昭武に随行パリ万博に赴く．大蔵省に出仕するも辞職して第1国立銀行を創立，頭取を勤める．我国産業界の草創期に当たって各種会社の発起人として名を連ね，その指導力を発揮した．子爵．昭和6年11月11日没．享年92．（1840-1931）

1　大正6年4月14日　（131号）

（封筒表）（本郷）区弓町二丁目三四

（癌）研究会（会）頭　青山胤通殿

（消印　日本橋　6・4・15　前0–7）

（封筒裏）封　澁澤栄一

（消印　本郷　6・4・15　前9–10）

拝啓，益御清適奉賀候，然は癌研究会第十回定期総会ニ付議決之件ハ別紙を以て御答申上候間可然御取計被下度候，就て拝陳仕候ハ老生事当初桂公爵総裁ニ御立被成候跡一時之都合上其副たる之位地を御引受申上候も，爾来何等之尽力も出来兼虚名其任を汚し候ハ真ニ心苦敷次第ニ付御辞退申上度候，何卒衷情御諒察被下御許容被成度候，右可得貴意如此御坐候，敬具

四月十四日　渋澤栄一

青山賢臺　梧下

［31］島田三郎の書簡

島田三郎は明治・大正期のジャーナリスト・政治家．嘉永5年江戸幕府御家人鈴木知英の3男として生まれる．横浜毎日新聞社員総代 島田豊寛の養子となり，同誌の主筆となる．立憲改進党の設立に参加し，以後政治活動，言論活動，キリスト教活動を活発に展開する．大正12年没．享年72．（1852–1923）

1　明治・大正　年1月27日　（88号）

拝啓，過日ハ御光来之処御匆々缺敬申上候，其節御物語り之件ニ付左之通り正誤ノ意味にて記載仕候，御出被下候翌日ハ日曜日にて出社ノ者少く，大學ノ輿論と申す文を記し候人に未だ面会不仕候に付，其報告ノ出所尚ほ判明セズ候え共，関係記事余り遅延セバ其効無之と存ニ付，不取敢此ニ掲ゲ候次第也，後報ハ更ニ可申上候，当用而已，匆々敬具

一月二十七日　島田三郎

青山先生　侍史

（新聞記事同封）

●青山博士と捕鼠．数日前の本紙にペスト予防法に関して「医科大学の輿論」と題して記載する所ありしが，右の記事中青山博士に関する事項には，聊か誤謬の点ある由にて，博士は左の如く物語れり．

「読売新聞に掲げたる予のペスト談中，鼠の買上を無益の如くに記したるより，貴新聞紙上には医科大学の輿論と云へる文出でゝ，之を駁せるヶ條ありしが，予は決して捕鼠を無益と言ひしに非ず，先づ本所区を厳にすべし，他区迄を一様にするに及ばずと云ひしを，読売記者が他区の捕鼠を無効と云ひし如くに記載したる為め，斯の如き予論を生ぜしなり，若し予にして捕鼠を無益と言ひたらんには，此駁論あるは寧ろ至当なり，尚ほ医科大学中貴新聞所載の如き説を為す者あるは事実なるも，之を輿論と言ふは決議せる衆論の如き顰みありて穏当ならずと思考す云々」

［32］千家尊福（せんげたかとみ）の書簡

千家尊福は明治・大正期の宗教家・政治家．弘化2年出雲国（島根県）出雲国造千家尊澄の長男として生まれる．出雲大社大宮司．埼玉・静岡・東京府知事貴族院議員，司法大臣歴任．男爵．大正7年1月3日没．享年74．（1845–1918）

1　明治27年9月1日　（89号）

（封筒表）東京市神田区裏猿楽町六番地

医学博士　青山胤通殿　親展

（封筒裏）　　埼玉県庁　男爵　千家尊福
（消印　武蔵東京・□□年九月一日・リ便）
拝啓，陳は曩ニ官命ヲ以テ黒死病々源研究ノ為メ御渡航相成，尓来百難ヲ冒シ万死ノ域ニ澁ミ果シテ古今未曾有ノ偉功ヲ奏シ我国光ヲ発揮セラレ候コト，実ニ欽慕之至ニ奉存候，然ルニ不図モ其惨毒ニ感染セラレ候由承リ，誠ニ憂慮不能措次第ニ有之，邦家ノ為メ速ニ御快復之程日々遙望致居候処，今般右偉勲ヲ荷ヒ無恙御帰朝相成大慶無限事ニ御座候，右は出京歓迎可致筈ニハ候へ共，地方政務多端之折柄不得其儀，不取敢御祝詞申述度如此御座候，草々頓首
明治廿七年九月一日　　男爵　千家尊福
医学博士青山胤通殿

［33］滝川藤介の書簡

滝川藤介の詳細不明.

1　明治・大正　年8月26日　　（107号）
（封筒表）青山博士　台下　　滝川
（封筒裏）
拝啓，只今福原男爵御見ニ相成黒白の合戦中ニ有之，貴殿より少し弱き様ニ存せられ候か，御閑ニ候ハ、御来駕相願間敷哉，右御伺迄如斯御座候，草々
八月二十六日　　滝川藤介
青山博士　台下

［34］都筑馨六（つづきけいろく）の書簡

都筑馨六は明治・大正期の官僚．万延2年2月17日高崎藩（群馬県）の名主藤井家の子として生まれ都筑家の養子となる．明治14年東大文学部（政治学・理財学専攻）卒業．伊藤博文，井上馨，山縣有朋等に重用され総理大臣秘書官，外務，内務次官歴任．男爵．大正12年7月5日没．享年63.（1861–1923）

1　大正4年3月5日　　（90号）
（封筒表）東京本郷弓町二丁目　青山胤通殿　親展
（封筒裏）　封　　鎌倉　都筑馨六
（消印　本郷　4・3・6）
拝啓，時下益々御清祥奉恭賀候，陳ば其後ハ頗る御無沙汰ニ打過ぎ無申訳ケ次第と存ジ居候，折柄貴重なる珍味御恵与に接し乍毎度の御厚情深く御礼申上候，早速一同にて頂戴仕り又友人へも福分け仕候，風味格別に御座候，扨又兼て御配慮願居候肥田平次郎氏其後之病勢素人ニハ少しも分り不申大体良好之方に御座候哉否，御次手之折ニ御一報賜らば至幸之儀に御座候，先は不取敢御礼旁々御願までニ，早々不一
三月五日　　都筑
青山国手　座下

2　大正5年10月30日　　（92号）
（封筒表）東京本郷弓町 博士　青山胤通殿　親展
（消印　5・10・30・后3–6）（切手3銭）
（封筒裏）〆　　鎌倉　　都筑馨六
（消印　本郷・5・10・31・前0–7）
拝啓，時下益々御清祥奉恭賀候，陳ば先般小生重病ニ陥リ候際ハ厚き御友誼を辱ふし不堪感謝候，病中安神シテ回復ヲ期待シ得たる心裏状態ハ全く右御友誼之賜物と存候，扨　又右御友情と共ニ他之一方御職業柄之援助ヲ蒙リ候事とて，是ニ対してハ聊ながら謝意之表示なかるべからずと存じ留守宅ニ其趣相命候処，反て御叱正を蒙リ候趣，誠ニ恐縮ニ存候，理屈ハ兎も角もとして切角之御厚意故難有御請仕リ置候，唯々将来又々御頼致候際ニ一曽（ママ）心苦シカルべくと存じ少々不安ニ存候儀に御座候，右ハ早速御礼可申上筈之処，去る二十三日余リの暖気ニ少々油断致し其為め風を引き漸々本日離床仕候為め延引，不悪御了承願候，弘田[1]先生へも礼状延引，御次手之節ニ御詫御伝言願候，早々不一
十月三十日　　都筑
青山国手　閣下

（1）弘田　弘田長（つかさ）．明治22年より大正10年まで帝大医科大学小児科教授を勤める．

3　大正5年11月14日　　（93号）
（封筒表）東京本郷弓町二丁目 青山胤通殿　親展
（消印　本郷　5・11・14）（切手3銭）

（封筒裏）〆　　鎌倉　　都筑馨六
拝啓，昨十三日付之芳墨忝拝読，御世話ニ成タリ頂戴物シタリ重々恐縮，切角之御厚意ニ甘へ難有賞味可仕候，不取敢御礼のみ，早々不一
十四日　　都筑
青山国手　机下

4　大正（6）年11月4日　　（94号）
（封筒表）東京本郷弓町　　青山胤通殿　親展
（消印　□1・4）（切手3銭）
（封筒裏）封　　鎌倉　　都筑馨六
拝啓，陳ば本日承り及候処ニ依れば其後之御容態余り思わしからず被為在候趣不堪御同情候，勿論為邦家頗る遺感（ママ）ニ奉存候，充分ニ御摂養之上可成速に御全快是祈候，当地の海浜院も此頃大分改良致□候様子ニ付き閣下ニも少シク海浜之空気御試被為候てハ如何哉，小生儀目下之処小康ヲ維持致居候へ共今だに腰抜之腑甲斐なさ，御見舞にも罷出兼候ニ付き一書呈上，不取敢御左右伺上候，早々不一
十一月四日　　都筑
青山先生　机下

5　大正6年11月8日　　（95号）
（封筒表）東京本郷弓町二丁目　青山胤通殿　親展
（消印　6・11・8）（切手3銭）
（封筒裏）〆　　かまくら　都筑馨六
（消印　6・11・9）
昨七日付之芳墨忝拝読，思ひしよりも険悪なる御容態を承り驚入申候，小生も快方とは世間体之申分にて今だに腰抜，唯々待天命之一事有之のみに御座候，御申越之通り千歳一遇之ドラマニ際し他人之為スコトが如何にももどかしく，唯ダ傍観スル之無止境遇こそ我ながら気之毒之至ニ候へ共是亦運命，如何共致方なき儀と存候，尤も此ドラマ之終局ハ寧ろ御互ニ傍観セザル方こそ反て花ふるべき哉にも被感候，其故ハ生等平素之心配之単ニ杞憂ニ終ラザルノ恐有之候事，稍々明燎（ママ）ニ成り来ル次第ト御座候，一の在生の責任ニ付てハ，賢兄程既ニ己ニ之ヲ尽シ終りたる人ハ甚ダ尠くと存候，生ハ短シ業ハ永シ，人ハ唯ダ其業之一連鎖タルノ責ヲ充サバ夫のミ充分と存候，而シテ誠ニ問フ何人か賢兄程ニ此之責ヲ充シタル者有之候乎，何れに致セ御互ニ地獄行ハ可成急がぬ事ニ致度と存候，尤も何時にても御供ハ辞シ不申候，先御用心々々々
八日　　床上にて　都筑
青山先生　机下

6　明治・大正　年4月27日　　（91号）
（封筒表）　青山博士殿　親展
（封筒裏）〆　　都筑馨六
謹啓，陳ば帰朝後早速参上可仕之処，諸事未ダニ落附不申，乍不本意之御無礼御免被下度候，添附之粗品ハ羊之胎内児之毛皮之由にて支那人之外套之裏に成ルものゝ由に御座候処，御職業柄冬期御車上用にも可相成乎と存じ供笑覧候，委細ハ拝眉之上可申上候，頓首
四月廿七日　　都筑
青山兄

［35］中村是公（よしこと）の書簡

中村是公は明治・大正期の官僚・実業家・政治家．慶応3年安芸国五日市村（広島県）酒造家柴野家の5男として生まれる．第1高等中学時代中村家の養子となり，明治26年帝大法科大学卒業し大蔵省に入省，台湾総督府赴任時代に後藤新平の腹心となり以後後藤新平の指示に従い満鉄総裁，鉄道院総裁，関東大震災後の東京市長を歴任．昭和2年3月1日没．享年61．（1867–1927）

1　明治・大正　年6月12日　　（110号）
（封筒表）市内本郷区弓町二丁目
青山胤通殿　拝復
（封筒裏）緘印　東京市麹町区有楽町壱丁目
南満州鉄道株式会社　中村是公
拝覆（ママ），益御多祥奉敬賀候，水津氏之件ニ付御書面拝誦仕候，右ハ過日小生朝鮮京城通過之際山根氏よりも御話有之候処，本件ニ付てハ未た河西院長より何等聞及候事も無之，且医学校之学科等之事ニ付ても十分承知致居らず，身ら以て唯今確答致兼候ニ付御手紙之次第学校主宰者たる河西氏へ

相通し候上，何分之御返事申上度，今朝御本人水津氏も相見え候ニ付，本文之次第申上置候，右御返事迄，早々拝具

六月十二日　　中村是公

青山博士殿　尊下

［36］中村雄次郎の書簡

中村雄次郎は明治期の陸軍軍人．嘉永5年伊勢国（三重県）波瀬村庄屋の次男として生まれる．陸軍士官学校，陸軍大学の創設に加わり，陸軍次官，満鉄総裁，宮内大臣歴任．陸軍中将．男爵．昭和3年10月10日没．享年77．（1852–1928）

1　明治　年10月8日　　（109号）

（封筒表）　本郷区弓町　　青山胤通殿　親展

（消印　□・10・8）（切手3銭）

（封筒裏）〆　四谷仲町　　中村雄次郎

拝啓，先日は御多忙中へ罷出種々御高話拝聴難有奉存候，其節御話御座候一条ハ陸軍大臣へ委細相話申候，大臣ニ於テモ御好意ハ至極感謝致居候ニ付，頃日規則ヲ定メテ御補助ヲ仰キ候事ニ立案中ナリトノ事ニ御座候，規則ハ小生一覧致し不申候ニ付，果（シ）テ尊意ニ適し候哉否ハ相分り不申候得共，右規則成案之上ハ御相談可申上ト被申居候，小生一度御礼旁参上可仕筈之処本日出発之事ニ取極申候ニ付，此度は失礼仕候，敬具

十月八日　　中村雄次郎

青山老台　侍史

追テ過般御手数奉煩候医学士国井某ハ弥製服所ニ採用致候事ニ取極申候間御承知置被成下度奉願候也

［37］長与専斎の書簡

長与専斎は幕末・明治期の蘭方医・医学者・医事行政官．天保9年肥前国大村藩（長崎県）藩医家に生まれる．緒方洪庵，ポンペ，ボードイン，マンスフェルトに学ぶ．内務省初代衛生局長として医事衛生制度を確立した功労者．男爵．明治35年9月8日没．享年65．（1838–1902）

1　明治　年7月12日　　（96号）

（封筒表）本郷弓町二丁目　　青山胤通様　親展

（封筒裏）〆　麻布日窪　　長与専斎

過刻ハ失敬御海容奉希候，大阪之御話ハ小松原氏にも臨席傍聴相成候ハヽ彼地之事情も多少理会（ママ）可相成候所，今日ハ其運ニ相成不申，残念之至奉存候，其内御序も候ハヽ御面会委曲御話置被下候方好都合と奉存候，而シテ検疫医改革案は正々堂々此次之会ニ御提議相成候様いたし度，野拙にも其準備いたし可申と存候，委曲は拝容ニ付シ要件ノミ，草々不宣

七月十二日　　専斎

青山賢台　梧右

［38］長谷川泰（はせがわたい）の書簡

長谷川泰は明治期の医学教育者・政治家・医事行政官．天保13年越後国（新潟県）に生まれる．佐倉順天堂，松本良順に蘭学を学ぶ．明治9年私立医学校済世学舎を創立．衆議院議員を3期，内務省衛生局長（31年3月より35年10月迄）を勤める．45年3月11日没．享年71．（1842–1912）

1　明治　年5月11日　　（97号）

（封筒表）本郷区弓町弐丁目　青山胤通殿

大至急親展

（封筒裏）〆　湯島四丁目八番地　長谷川泰

拝啓，陳は過日御願申上置候通．明十二日午後四時内務省え御来会被下度右御願迄，斯如早々敬具

五月十一日　　長谷川泰

青山博士　虎皮下

［39］濱尾新（あらた）の書簡

濱尾新は明治期の教育行政官・政治家．嘉永2年但馬国（兵庫県）豊岡藩士家に生まれる．米国留学後東大法文理3学部の綜理補．文部省専門学務局長，帝大総長，文部大臣，枢密院議長歴任．子爵．大正14年9月25日没．享年77．（1849–1925）

1　明治27年6月4日　　（133号）

（封筒表）裏猿楽町六番地　　青山胤通殿

（封筒裏）　濱尾新
昨夜ハ欠敬多人数参集御同慶之至候，先刻ハ御来臨被下候所，帰宅前ニて家内之者も承知不仕よしニて遺憾不少候，シヤンパン及巻煙草家内之者より寸志迄差上度旨ニ有之，可相成ハ船中へ御携被下候ハヽ幸甚之至候，愈明日ハ御出発(1)之趣，異常の壮挙ニして御苦労之至候，国家の為め学術の為め御成功を期し，呉々厚く御自愛何卒無恙御帰朝之程千祈万祷之至候，匆々頓首
六月四日　新
青山老契
追て家内之者より呉々宜申上呉候様申出候

(1) 出発　青山胤通は明治27年6月5日宮本叔，木下正中を伴いペスト研究の為香港に出発する．

2　大正元年8月10日　（132号）
（封筒表）　信州軽井澤　青山胤通殿　必親展
（消印　小石川　1・8・10后4–6）（切手3銭）
（封筒裏）封　東京小石川金冨町□壱番地
濱尾新
謹啓，本日渡邊宮内大臣より面話有之，今後貴台及佐藤，三浦の三教授を宮内省御用掛可被仰付事ニ致度旨，尤平常ハ大学の教務ニ差支無之筈ニ付孰れも御受可仕様御計呉候様被申候，大学ニ於ても別ニ差支可無之余事とも異り御承諾之上折返し御回報被下度候，今後とも右ニ付御尽瘁之程切望する処ニ御坐候，御回報次第三教授之分合せて宮内大臣へ回答可仕候，其後当地暑気相加り大分凌難く其地定て清涼ニ可有之，過日非常御特務の御労も可不少，折角御加養是祈候，匆々不具
八月十日　新
青山博士殿

（注）濱尾新は明治26年より30年迄帝大総長を勤め，再び38年より大正元年8月迄東京帝大総長を勤める．

3　明治・大正　年7月7日　（134号）
（封筒表）東京本郷区弓町二丁目　青山胤通殿
（封筒裏）封　上州伊香保　木暮武太夫方　濱尾新
一昨日伊香保へ来着一同無異，出発前ハ御診察被下深謝之至候，当地来浴者頗ル多ク，客舎概ネ充満上等室前約済ノ由，然ルニ昨日金太夫ニ面会候ニ付貴台ニハ箱根又ハ伊香保へ赴カルヘキ筈ニテ上等室有之候ハヽ当地ニ見ヘラルヘキ様申聞候所，御出向可相成候ハヽ余人トモ異リ特ニ繰合可申，表二階ノ上等室ハ井伊家ニテ借上相成居候ヘトモ程ナク明クヘキニ付都合可仕旨申出候，一体浴場ニ於テハ医大家ノ来場ヲ請ヒ注意ヲ受クルコト公私ノ為メ益アルニ付客舎中何レトモ都合致可然旨モ申聞候義ニ御坐候，右ノ次第ニ付可成貴家族トモ御出向，暑中御養護相成度存候，菊池総長ニモ当地ニ相見へ居候ニ付，医院建築ニ関スル件ハ相話置候，匆々不具
七月七日　新
青山博士　台下
追テ委細ハ金太夫ヨリ直チニ御通信可仕存候，又金子，加藤［高明］，弘田，梅等ノ諸氏モ相見居候由ニ御坐候

［40］藤澤利喜太郎の書簡

藤澤利喜太郎は明治期の数学者．文久元年佐渡の幕臣の長男として生まれる．明治15年東大理学部卒業．翌年欧州留学．20年帰国後帝大理科大学教授に就任．中学校，師範学校の数学教科書編纂，又統計を用いて生命保険業の発足に貢献した．昭和8年没．享年73．（1861–1933）

1　大正7年2月15日　（98号）
（封筒表）［市内］本郷区弓町二丁目卅四番地
青山徹蔵殿
（封筒裏）〆　大正七年二月十五日
東京市小石川区諏訪町三十六番地
藤澤利喜太郎（ゴム印）　〆
（消印　麹町・7・2・15・后8–9）
（消印　本郷・7・2・16・前0–7）
拝啓，時下厳寒之候益々御清康奉賀候，先日は愚妻トモ御招ニ預リ有難奉謝候，尚ホ又昨日は御尊父(1)様御写真及御遺物御贈被下重々之御厚情感謝之至ニ御坐候，不取敢乍略儀以書中右御礼申上

候，乍末筆御母堂様へ宜敷御鶴声を乞，匆々拝具
大正七年二月十五日　　藤澤利喜太郎
青山徹蔵殿　侍史

（1）尊父　青山胤通の事.

［41］穂積陳重（ほづみのぶしげ）の書簡

穂積陳重は明治・大正期の法学者．安政2年四国宇和島藩士の次男として生まれる．大学南校，開成校に学び，明治9年英，独へ留学．東大法学部教授，帝大法科大学長歴任．民法・刑法・国際法等多くの立法に関わる，男爵，大正15年4月没．享年72.（1855–1926）

1　明治45年7月27日　　（99号）
（封筒表）本郷区弓町二ノ三四　青山胤通殿　親展
（消印　本郷・45・7・27・后1–2）
（封筒裏）〆　東京市牛込区払方町九番地
穂積陳重（ゴム印）
拝啓，国民の大憂[1]に当り至大の重任を負ハれ御心労之程奉察候，何卒皇室の為め国家の為め御自重御尽瘁有之様奉祈候，御見舞旁匆々不尽
七月廿七日　　穂積陳重
青山博士　硯北

（1）明治天皇の御不例．明治45年7月30日崩御.

［42］宮本叔（はじめ）の書簡

宮本叔は明治・大正期の細菌学者．伝染病学の権威．慶応3年信濃国に生まれる．明治25年帝大医科大学卒業．駒込病院長兼任帝大医科大学助教授を経て，青山胤道没後，大正7年教授となる．大正8年没．享年53.（1867–1919）

1　明治38年12月2日　　（100号）
（封筒表）　日本東京市本郷区弓町　青山胤通殿
（消印　□□　□・12・14）
（封筒裏）緘　十二月三日
清国北京公使館　宮本叔
寒冷之候御起居如何に御座候哉，御伺申上候，着後早速御音信申上可くの処，是彼取紛れ居リ今日迄延引疎懶致御海容奉祈候，全権大使[1]は非常に多忙なるに関せず格段なる異常なく職務に鞅掌し居られ候，昨日の報知新聞に卒倒されし由電報有之候由にて外務省より問合せ有之候得共，右は一昨日支那大官を饗応されし席上軽度なる脳貧血の感ありし為め席を立ち別間に休憩されしを誤聞候者にて，少時にて回復，昨日は例の通り会議にも出られ主人として外国人をも饗応せられ候，只々御承知の通疲労し居られ御体質にて劇務に当たり心神を労し居られ候事故心配に堪へず，一日も早く会議の終らむ事を翹望致し居り候，然し到着以来有名なる北京の朔風は無之気候温暖例年に比なき事の由にて大使に対し候ては極めて幸福に御座候，右之次第故先々御休神被下度候，詳細は帰朝拝顔の上万縷可申述候，当地談判の模様は慶親王は病なりとて臨場せられず袁世凱[2]，瞿鴻？其任に当り居り候，然し袁世凱主なる役者なりと申す事に候，今回は双方共能く秘密を保ち袁世凱の如きは臨席の幕下（殆んと皆袁の幕下の由に候）をして外出せしめず，他人に面会せしめざる由に候故に露独仏等の公使等焦心，其実際を知らむと苦むも結果を得ず，「露公使は□□となつて居る」との噂に御座候，右の次第にて談判は如何なる度合迄進み居り候や小生共には不明に御座候へ共，なほ暫く滞在を要する事と存んじ候，昨日事務室迄延引期願差出し置き候間何卒宜敷御含み願度冀望仕り候，然し兎に角二十一日頃より殆んど休暇なく毎日の会見故年内には帰朝し得らる可くと存んし候，清国には珍らしき遣口，袁世凱なればこそと存んぜられ候，袁世凱は中々の評判にて見聞候所実際中々の遣手に御座候，日本人を充分使へ候て実務を挙け開進の方向に鋭意使へ候て進み行く処，兎角の議論は有之候得共総督中第一なる可くとの事に候，然し応接中細心にして如才なき様子，出身の門閥家たらざる為め顧慮多き結果かとも見へ苦心察せられ候様の心地致し候，四五日前にも官人の供人を連れ連列するを禁じ，繁文褥礼を固く戒め候など清国の現状としては出色に御座候，此程の袁の観兵式の如きは非常の評判にて外人をも驚かし，太后[3]の御覚も目出度かりし由，

然し皆目色の同じき弁髪士官等の仕事の由に候，御承知の如く袁の顧問は重要なる所皆日本人にて，李鴻章の仕来りを廃するに忍びざる所に二三の洋人有之候も実力は無之との事に候，瞿鴻禨は短気なる人の由ニ付小村大使とは面白き激論も可有之と存んじ候，北京中央政府は大に後れ居り候得共，義和団騒動以来方針一変，西太后も兎に角他国の文物輸入に同意し居られ候由にて小生共之れ迄考ひ居り候とは全く異なり居り候，御承知の如く親王大臣を海外に派し，憲法視察など随分方針の転換も甚しく候，科挙の如きも従来の八肱（ママ）文式を廃し政治経済実用の思想を交へ候者を及第せしむる由にて日本留学生などは帰来大に羽を延ばし用いらるゝ者多き由に御座候，然し一面内部の腐敗を聞き候へば鏡の表裏を見る心地して私共には判断つかず候，船を出て太沽を経，塘沽に上陸，直ちに見聞，悉く異様日本式の支那兵あり，弁髪の日本人あり，北京に入れば廣軌鉄道の宮城近かくに敷かれたるあり，各国の兵隊武装して列をなしつゝ行くあり，見る所聞く所尽く三国誌（ママ）又は春秋戦国時代の心地致され候，殊に日本人の遇ふ人尽く戦国策士の如き態度ある様感ぜられ候，其他海陸軍外交者の一致など門外漢には中々に物珍らしく候，御来游も有之候ハヾ中々に興味を感ぜられし事と御噂申し居り候，同仁会[4]の如き従来の遣口は詳知仕らず候得共実際を見聞候て多少得る所有之候，拝顔の節に詳細可申述候，今回ハ当地大学堂進士舘等を合併して大学を設立する計画有之，又巡警部を設けて初めて衛生□と云ふものを其内につくる由に付，是非共大学中医学部を設け衛生の顧問に日本人を聘する事に致し度おりおり話始め居り候へ共，談判騒ぎにて進み兼ね居り候，北京の教育は日本人の手に帰し居ると申しても宜しく候，新聞紙上にて已に御承知の如く太沽着以来北京政府の優待は一方ならず候，特別仕立の列車を出し接待委員車中にありて饗応をなす，白河沿岸より天津北京迄沿道兵隊巡査を出たし敬礼せしむる，着后国賓の礼を執るなど単に大使としての礼のみにあらざる様に御座候，謁見の節も天子外国使臣と握手せられたるは空前の由に候，私も幸に随員として謁見に列なる事を得，所謂紫禁城を見，有名なる両陛下に咫尺仕り候，紫禁城裏の光景已に異様なるに偉大にして眼光鋭く落付きたる西太后，正面の玉座に付き蒼白にして落付きなき皇帝[5]，其側の低き倚子に踞し居られ候など実に奇異に見へ申候，謁見中天子は無言にて摂政太后大使と種々談話（伍廷芳通弁）せられ候が，其態度実にいらき者に候と評判斗りにも無之と感じ申候，北京は不潔にて面白くなき所に御座候，紅塵万丈，肩摩轂撃強ちに詩的誇大のみには無之候，つまらなき事余り長きに失し候故擱筆仕候，時下遙かに御一家の御健康を祈り申候，頓首

十二月二日　　宮本叔

青山先生　硯北

当地其他地方の漢字洋字新聞共殆んと談判の事に就ては議論を掲けず候，別紙満州日報切抜きは経過を報ずる事は実に近かく，且詳密故御覧に入れ拙筆を補ひ申候.

(1) 全権大使　小村寿太郎外務大臣．小村寿太郎は明治38年9月5日日露講和条約を締結，10月16日帰国．更に11月6日清国との満州，朝鮮の戦後処理の交渉を，露，仏，独等列強の干渉を排除し条約を締結，39年1月1日帰国する．この時宮本叔は医官として随行した.

(2) 袁世凱（えんせいがい）　清国末の軍人・政治家．1859年（安政6年）生まれ．清国末期陸軍の近代化を図り政府要人となったが一時失脚した．1911年辛亥革命によって首相．1912清帝の退位後，中華民国初代大総統．ついで1915年自ら帝位についたが，反帝制運動が起って失脚，1916年（大正5年）没．享年58.（1859–1916）

(3) 太后　西太后．清国末期の権力者．1861年（文久2年）夫 咸豊帝の崩御により以後，没する1908年（明治41年）迄47年間清国を統治した．享年74.（1835–1908）

(4) 同仁会　明治35年近衛篤麿，長岡護美，北里柴三郎等が日，清，韓，其他アジア諸国への医療支援活動を行う為設立した財団法

人．昭和20年まで続いた．

（5）皇帝　清国第11代光緒帝．西太后の子同治帝が早世した為，西太后の妹の子が光緒帝として擁立される．

［43］山川健次郎の書簡

山川健次郎は明治・大正期の教育者・理学博士．嘉永7年会津藩士家に生まれる．米国へ留学．明治12年東大物理学教授．34年東京帝大総長（38年11月迄），44年九州帝大初代総長，大正2年再び東京帝大総長，3年兼任京都帝大総長（10ヶ月間），9年東京帝大総長辞任．この外　私立明治専門学校（現在の九州工業大学）の初代総裁，旧制武蔵高等学校（現在の武蔵大学）の校長などを勤める．男爵．昭和6年没．享年78．（1854–1931）

1　明治37年　月13日　（102号）

（封筒表）青山胤通殿

（封筒裏）封　　山川健次郎

医院の助手三十七人，副手五十三人都合九十人の内十五人ハ幇助員として出だし得べき昨日の御相談ニ御座候いき，扨新卒業生副手を望むものを六十人と仮定すれバ，助手副手合せて百五十人を得べし，而して大学ニ於て要する人員ハ七十五人（90–15=75）即チ百五十人の半数ニ御座候，故ニ二ヶ月交代とすれバ畧年ニ六ヶ月幇助員として勤務し，六ヶ月大学ニ勤務する事と相成り可申候，昨日の話中二ヶ月幇助員として勤務し十ヶ月大学ニ在る様話も御座候いしが，右の勘定故勧誘の際間違無之様仕度候間，此辺御一考被下度候，将又教室ニ勤務の助手十四五名有之候様存候が，皆学士（少くとも多数ハ）ニ御座候半間，此等の人も都合して幇助員たるを得られ申間敷候哉，敬白

十三日　　健次郎　拝

青山殿　侍史中

2　大正7年2月14日　（101号）

（封筒表）青山徹蔵殿

（封筒裏）封

東京府北豊嶋郡巣鴨村大字池袋百番地

山川健次郎

記

一，豹皮　壱

右ハ御亡父様御遺物として御贈与被下難有受納仕候也

大正七年二月十四日　　山川健次郎

青山殿

［44］渡辺国武の書簡

渡辺国武は明治期の官僚・政治家．弘化3年諏訪高島藩士家に生まれる．大久保利通に認められ民部省出仕．地租改正に尽力．大蔵・逓信大臣歴任．子爵．大正8年5月11日没．享年74．（1846–1919）

1　明治（37）年4月12日　（103号）

（封筒表）　青山胤通様　親展

（封筒裏）〆　　渡邊国武

春光憙微之候萬福御帰朝[1]奉賀上候，悴千冬[2]儀御同艦ニて帰朝，辱高顧候旨申出奉謝上候，高諭之旨も有之由ニて翌日より宮の下温泉へ転地いたし申候，尚病状及保養之心得方等伺置度参謁可相願処，一両日歯痛相悩居申候間妹高山逸子申出候間，乍御面倒御示諭被下度奉希上候，余は拝芝万御礼可申上候，頓首

四月十二日　　国武　拝

青山国手　虎皮下

（1）帰朝　青山胤通は明治36年5月より欧州視察に出掛け37年4月帰国した．

（2）千冬　渡邊千冬．明治・大正・昭和期の政治家・実業家．千冬は明治9年渡邊千秋の3男として長野県にて生まれる．叔父 渡邊国武は生涯独身を通した為，その養嗣子となる．帝大法科大学卒業後実業界から貴族院議員となり司法大臣を勤める．子爵．昭和15年没．享年65．（1876–1940）

2　明治42年7月　日　（104号）

（封筒表）　東京本郷弓町　青山胤通殿

（消印　本郷・42・7・18）

（封筒裏）〆　日光山　輪王寺内　紫雲閣ニて

子爵　渡邊国武

炎暑之候万福御清勝奉賀候，さて今回病気[1]ニ於ては御多事之処御繰合御来診被下，御蔭を以経過良好，感謝不知所□□，汽車旅行も何等異状無之当輪王寺紫雲閣と申処借受，静養いたし居申候，東京よりは余程涼しく感冒なとにかゝらぬ様随行者相整しめ置候位之事，大幸不過之，不取敢御報告御挨拶旁如此御ざ候，頓首

青山国手　虎皮下　　国武　拝

（1）病気　脳卒中にて倒れ以後政官界を引退.

[45] 渡邊千秋の書簡

渡邊千秋は明治・大正期の官僚・政治家．渡邊国武の実兄．天保14年諏訪高島藩士家に生まれる．西南戦争時鹿児島県大書記官を勤め，後に鹿児島県令・同県知事・北海道長官・内務次官・内務大臣，宮内大臣歴任．大正10年8月27日没．享年79．（1843–1921）

1　明治42年7月15日　（106号）

（封筒表）本郷弓町 医学博士 青山胤通先生 親披

（封筒裏）　緘　於麻布本村町　　渡邊千秋

（消印　本郷・42・7・15）

謹啓，梅霖相霽俄然暑気相催候，益御多祥奉恭賀候，国武儀発病已来特ニ御懇篤御治療被成下候結果日々快方ニ相向，昨今著しう佳良ニ立到千万奉感謝候，全ク御芳情ニ浴し候故爰ニ立到全家一族挙て御礼申上候，就て御許免も被成下候次第ニ付今日日光へ向只今発途仕候，右御報知鳴謝に相兼如此御座候，敬具頓首

七月十五日　朝　　麻布ニ於て　千秋

青山国手　閣下

2　明治・大正　年12月28日　（105号）

（封筒表）　本郷弓町二丁目三十四

青山医学博士　先生　親展上置

（封筒裏）緘　　高輪　渡邊千秋　煙草箱二添

又一里塚を越候事ニ相成候所，益御多祥奉拝賀候，尓来御無□候，此品いかにも微少ニ御座候のミならす，私ハ如御承知煙草の下戸ニ御座候間，良否も□分候得共恭呈候，此段御笑留被成下候様願上候，書外新年目出度拝晤と早々頓首

十二月廿八日　　千秋

青山博士　先生

[46] 端方の書簡　2通　略

端方は清国の官僚・政治家．明治41年清国の両江総督兼南洋大臣を勤める．明治44年没．享年51．（1861–1911）

この2通の手紙は，明治41年外務大臣小村寿太郎の依頼により青山胤通が南京に住む端方を病気診察の為南京に赴く．その時の礼状である．

[47] 盛宣懐の書簡　2通　略

盛宣懐は清国の官僚・資本家．李鴻章の部下として巨大な富を築いた．又郵伝部大臣を勤める．（1844–1916）

この2通の手紙は青山胤通が端方病気診察の為南京に赴いた時，序でに上海に住む盛宣懐を診察した．その時の礼状.

[49] ベルツの書簡　2通　略

（完）

[主要参考文献]

朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典」』朝日新聞社　1994年11月30日発行

鵜崎熊吉編『青山胤通』青山内科同窓会　1930年5月8日発行

泉孝英編『日本近現代医学人名事典　1868–2011』医学書院　2012年12月5日発行